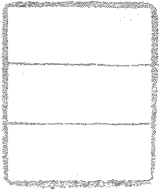


## 小笠山礫層からMetasequoiaの産出

著者	土 隆一, 黒田 啓介, 松井 由紀乃
雑誌名	静岡大学地学研究報告 : 地学しずはた
巻	1
号	1
ページ	1-2
発行年	1967-12-25
出版者	静岡大学地学教室
URL	<a href="http://doi.org/10.14945/00005768">http://doi.org/10.14945/00005768</a>



## 小笠山礫層から *Metasequoia* の産出

土 隆一\*・黒田啓介\*\*・松井由紀乃\*\*\*

掛川市の西南方にある小笠山を中心として西北方へのび、袋井から磐田原台地の下まで広く分布する礫層は小笠山礫層と呼ばれる。この礫層は曾我層群を不整合におよび、西部では磐田原礫層に不整合におおわれる。全体としてSWにゆるく傾き、層厚は小笠山で160 m、磐田原で100 mほどである。大部分は礫層からなるが、小笠山西部から袋井にかけては、しばしばシルト層をはさみ、その中から淡水棲貝類の化石や植物遺体の産出が知られている。

筆者らは、これらのシルト層中の植物遺体の調査をすすめている折、袋井市北方の西浦附近で民家横の崖から *Metasequoia disticha* Miki の球果数個と葉片を見出した。本種の消長は鮮新—洪積世頃の index と考えられ、又静岡県下では初めての産出なのでここに報告する。

含有シルト層の層位は小笠山礫層全体から見れば下部に属する。シルト層の層厚は5 mで、中部に薄い暗褐色砂層をはさみ、この砂層より上位の塊状シルト中に産する。*Metasequoia* の遺体の数は少なく、出現部分は葉片よりも毬果の方が目立つこと、毬果の柄がとれていることなどからみると、現地堆積ではないかも知れない。しかし、毬果は磨耗、破損をほとんど受けていないので遠方から運ばれてきたとは思われない。当時、袋井付近の平地に生育していたものと考えられることができる。現在のところ、小笠山礫層からの産出はここからだけで、かつ、産出量は多くないので、当時の優占種ではなかったように見える。

このシルト層の露頭からは、*Metasequoia* 以外には、*Sapium sebiferum* var., コナンキンハゼ、*Paliurus nipponicus* シキシマハマナツメ、*Berchemia racemosa*, *Najas* sp., *Rosa* sp., *Iris* sp., *Cyperus* sp., *Carex* sp., *Scirpus* sp. が採集された。

小笠山礫層の地質時代については、まだ時代を決定できるような資料に乏しいが、この地方の洪積統は、古い方から順に、曾我層群、小笠山礫層、牧ノ原礫層（磐田原礫層）、長者原礫層に大きく4分することができ、曾我層群と磐田原礫層の間に位置することは間違いない。曾我層群は鮮新世末とも考えられるが、化石貝類群からみると洪積世初期と考えた方がよい。一方、磐田原礫層はこの地方の“中位段丘”堆積物で関東の下末吉層に対応しR—W間氷期の形成と考えている。いずれにしても、現在のところ、小笠山礫層の時代は洪積世前期ないし中期と云える程度である。小笠山礫層と同時代と考えられるものとしては、この地方では渥美累層、東鴨江累層、坂部原礫層、久能山礫層などがあり、これらは“高位段丘”堆積物として一括することはできるが、細かく見れば2時代にわけられる可能性もないとは云えない。

ところで、*Metasequoia disticha* は近畿地方を中心として各地から産出しているが、大阪層群

\* 静岡大学理学部地学教室

\*\* 東海大学第一高等学校

\*\*\* 袋井市立周南中学校

では最下部および下部には知られるが上部からは知られていない。そして、下部は *Metasequoia* 植物群の消滅期とされ、気候の寒冷化の予想の下に、下部と最下部の間に鮮新世と洪積世との境界がひかかれている。したがって、この *Metasequoia* の産出だけから、小笠山礫層と大阪層群の対比を試みるならば、*Metasequoia* 含有シルト層は大阪層群下部より新しくはないかもしれない。しかし、一方では、それ以後の時代まで本地域では *Metasequoia* が生存していた可能性もないとは示えない。

*Metasequoia* 含有シルト層の植物組成の特徴を考察してみると、絶滅種としては *Sapium sebiferum* var. , *Paliurus nipponicus* があるのみで、しかも多産する。この点は大阪層群上部の組成に近い。しかし、このシルト層上位下位それぞれ近い層準のシルト層中の植物の中には、下位から *Styrax microcarpa* コミエゴノキ、上位から *Cunninghamia Konishii* ランダイスギ、*Pterocarya paliurus* -サワグルミの類、*Trapa platycerata* などのいわゆる *Metasequoia* 植物群の要素が産出するので、この点では大阪層群下部の例えば芦屋ゴルフ場東端トックリ谷の植物群に近い。これらの植物群は、*Metasequoia* は含むが、*Pinus triforia* オオミツバマツ、*Liquidambar*、*Keteleeria*、*Pseudolarix*、*Taiwania* などが現れる鮮新世とされる型とは全くちがう。しかし、大阪層群下部に見られるような *Pinus koraiensis* チョウセンマツ、*Menyanthes* ミツガシワなどの寒冷要素はここでは見られない。*Picea koribai* オオバラモミ、*Juglans cinerea* var. *megacinerea* オオバタグルミもこの地方ではまだ見出されていない。

以上のように、従来関連の乏しかったこの地方と近畿地方との対比が今後研究をすすめることによって可能になると思われる。小笠山礫層については層序の調査が終ってから改めて述べる。植物遺体についても詳しくは別の機会にゆずり、ここでは *Metasequoia* が産出した新事実をあげるにとどめる。

終りに、植物遺体の同定について御教示頂いた三木茂博士に厚く御礼申しあげる。

## 文 献

- HUJITA, K. (1954), Stratigraphic significance of the plant remains contained in the Late Cenozoic Formations in central Kinki, Japan. *Jour. Inst. Pol., Osaka City Univ.*, G, vol. 2, p. 75-88.
- 市原 実 (1960), 大阪, 明石地域の第四紀層に関する諸問題. 地球科学, no. 49, p. 15-25.
- 横山次郎・坂本 亨 (1957), 地質図幅“見付” 1:50,000 並びに同説明書.